

実践ノート

看護を「想像」し「創造」する授業 —精神看護における「看図作文」と「きゅうちゃん」の力—

田中雅美¹⁾

TANAKA Masami

キーワード：精神看護学・看図作文・きゅうちゃん

I. はじめに

昨今の社会情勢に伴い、看護職員には、多職種と連携し、保健・医療・福祉を提供することへの期待と、対象の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が求められている。また、疾病や健康の概念も変化しているため、対象を生活者として捉え、看護サービスを提供するという役割も求められている。

筆者（授業者）は、看護師養成所で精神看護学を担当している。学生に対しては、精神看護学実習（以下実習）において、受け持たせていただく対象者の生きてきた背景や、地域社会で生活する対象者の看護を創造的に学んでほしいという願いがある。

吉野ら（2019, p.125）は、「精神機能の障害は、生物学的な検査結果よりも日常生活行動や対人関係など生活場面での把握を必要とする」と述べている。学生は、実習で出会う対象者の入院中の今の姿を捉えることはできる。しかし、地域社会で生活する場面を想像し、理解することは難しい。

今回、「見えそうで見えないきゅうちゃんの表情」と「散らかった部屋」を組み合わせた絵図（図1）を作成した。この絵図を用いた看図作文を含む授業を行った。この授業の中で、学生がどのような「想像」をし、看護の「創造」へとつなげて

いったのか、実践した内容と学生の記述を報告していく。

II. 授業対象者及び科目の位置づけ

授業対象者：A看護専門学校 3年生 35名 科目 目：「精神看護学方法論Ⅱ」 第3回（全15回） 学 習 目 標：患者—看護師の関係構築と関わり 及び自己理解の必要性について理解できる
--

本時では看図作文を導入とし授業を実施した。看図作文を通して、自己理解の必要性と共に、対象者の生きてきた過程を理解する必要性についても学ぶことができるよう科目を位置づけた。自己理解を深めることと対象者の人生を理解することは看護を実践するうえで大切な意義をもつ。なお、今回対象となる学生は、看図アプローチを用いた授業は初めてである。

III. 授業の実際

III-1 課題の提示

授業の4日前に事前課題の内容を説明し提示した。課題提出日は授業の前日に設定した。図1が今回用いた絵図である。この絵図をもとに「きゅうちゃんは、どんな想いや気持ちでしょう。500

1) 学校法人高木学園大川看護福祉専門学校

文字以上できゅうちゃんの物語を書いて下さい」と教示し、物語のテーマもつけるよう指示した。課題提示時に学生から、具体的にどのように記載すればよいのか等の質問があったが、「精神看護学の課題である」ことのみ返答し、学生の想像性を期待した。

III-2 物語の構想と完成

授業前日の課題提出日に35名全員が提出した。前日に提出してもらったのは、クラス全体で共有

する際に自薦・他薦で発表者が決定しなかった場合を想定し、共有する物語を授業者があらかじめ選定するためである。

作品を完成させるまでの学生の感想を一部抜粋して以下にまとめる。（表1）

表1

- ・精神疾患を改めて勉強した。物語を書き上げるまで楽しかった。
- ・症状やその症状の当事者の思いについて調べて書いたことで、悩んでいる人の思考について知ることができた。
- ・ハッピーエンドの物語を書きたかったけど、きゅうちゃんの様子を見ていたら、どうしてもハッピーエンドにならず、精神症状の「妄想」の中の物語になってしまった。書き終わったとき、苦しんでいるきゅうちゃんと同じ気持ちになってとても疲れた。
- ・どうしても物語の前半部分が自分の経験と重なってしまって、少し苦しくなった。
- ・書き始めるまでは難しかったが、書き始めると物語の流れが浮かんで、考えることが楽しかった。
- ・等身大の自分で書いた。全てではないけど自分と同じ部分があって、書き終わった時すっきりした。



図1

注：図1中の「きゅうちゃん」は全国看図アプローチ研究会専属アートスタッフの石田ゆき氏が制作したものである。実際の授業では、背景の部屋の画像は https://twitter.com/yamorigecko_V/status/1269619178421407744 掲載のイラストを活用した。本稿では著作権への配慮から、石田が制作したイメージ図を掲載しておく。

III-3 作品の発表

ラウンドロビンで共有を行った。ラウンドロビンでは、自分の作品について、どのような考えで書いたのか、どのような精神症状を想定し書いたのかなど作品の構想段階を紹介する学生もいた。ラウンドロビンで共有後に6作品の全体発表を行った。他薦の1作品を除き、5作品については授業者が選択した。選択した物語は、「その人らしさ」を大切にしたい作品、妄想や幻聴で苦しんで

いる作品、PTSDで苦しんでいる作品、等身大の自分が反映された作品などである。そのような対象者に、どのように寄り添うか、どのようなサポートが必要か、という看護の視点で授業者の感想や投げかけも述べていった。

全体発表では、どの作品も興味深く学生は聞き入っていた。発表後、ほとんどの学生が「楽しかった」と感想を述べている。感想の内容を一部抜粋し以下にまとめる。(表2)

表2

- ・自分が書き終わった後は、ちょっと苦しかったけど、発表は楽しかった。
- ・物語の発表は、「こんな症状なのかな」と想像しながら聞くことができた。
- ・どの作品も設定をしっかり考えていてすごいと思った。また、それぞれの作品にはきゅうちゃんがどういう世界で生きているのか表現されていた。
- ・〇〇さんがこんな作品を書くんだと、新たな発見になった。
- ・その人らしさやその人の優しさが物語の中に表れているなど思った。
- ・今までの経験や考え方、価値観など、色んなところに反映されるのかと思った。
- ・同じ絵を見ても、それぞれ捉え方や想像の仕方は違うので勉強になった。
- ・頑張っって書いたことが相手に伝わり、相手の頑張りも伝わってきて楽しかった。
- ・ハッピーになったきゅうちゃん、誰かに助けてもらったきゅうちゃんの物語もあって自分もホッとした。
- ・自分が想像したきゅうちゃんが、コミュニケーションが苦手な自分とそっくりだった。そこから、環境に影響されやすく、疲れてしまう自分の性質に気づくことができた。
- ・看護の対象者が悩んでいる原因など、その人の背景など想像しながら相手の立場になって考えることが大事で、想像する力は大切だなと思った。
- ・全員の作品を読みたかった。作品集を作ってほしかった。

III-4 作品紹介

以下に学生が書いた作品を抜粋し紹介する。
『 』内は作品のテーマである。

学生A『僕のふつう』

はぁ。やっと落ち着く。

おばさんが、また勝手に部屋を片付けた。だから、いつもの部屋に戻した。これで大丈夫。おばさんは、なんで部屋を片付けたがるんだ。こっちの方が落ち着くの。だって、僕の母さんもそうだった。母さんは心の病気で、掃

除や料理、何にもできず、家はいつも物がたくさんあふれていた。お風呂にも入らないから「くさい」と言われ、学校ではいじめられた。そのうち、学校に行けなくなった。

この頃から、誰もいないのに声が聞こえ始めた。おばけみたいな影がみえた。でもそれが、ふつうだった。

母さんと離れることになって、今のこのおばさんの家に来た。

おばさんはいつも僕にこう言う。「何も聞こえないわよ」「ふつうにしてよ」「どうして、

あなたはみんなと同じようにできないの」

でもね、おばさん。家でも、外でも、声がたくさん聞こえる。やっと外に出ても、みんなが、僕の悪口を言っている。いつも誰かに見張られている。

僕には聞こえる。見える。僕は病気なんかじゃない。

ふつうって何。僕にはこれがふつうの世界。

おかしいのは聞こえない、見えないみんなのほう。

学生B『きゅうちゃんの見えている世界』

私はきれい好き。いつも部屋をきれいに片付けているんだ。でもなぜか、最近ママから部屋を散らかしすぎて怒られるんだけどなんでだろう。床には、もの一つ置いてないし、寝転がったりもできるのに。ママには何が見えてるの？

考え事をしてたら眠くなってきたなあ。ちょっと寝てみようかな。そういえば、この頃よく部屋に虫がでてくるんだ。どうやっても捕まえられた試しがない。触れたことだってない。一匹見つけると、それからうじゃうじゃ沢山湧き出てくる。部屋中、動き回ってほんとうに気分が悪い。でもそんな時は、物を投げれば解決できるんだ。あの虫たちは、弱いかから攻撃すればすぐに逃げていくからね。あっ、またいた。それでも、投げたものは元の場所に勝手に戻ってくるから部屋はきれいなまま。

やっぱりママがおかしいんだ。ママー！病院に行ったほうがいいんじゃないのー！！？

うわっ、また虫（布団を投げつける）

学生C『きゅうちゃん的一步』

きゅうちゃんの部屋に久しぶりに明かりがつかしました。足の踏み場もないような部屋の真ん中へと移動し、散らばったゴミのそばを避けてゆっくりと腰を下げました。

きゅうちゃんはこの部屋が嫌いでした。薄

暗い部屋の中で乱雑に作り上げられたゴミの山を見るたびに『自分は今もう社会に戻れないんじゃないか』『ここにしか居場所がないんじゃないか』というように暗い気持ちになってしまうからです。

しかし、今のきゅうちゃんはこれらを見ていつもと違う感情を感じています。きゅうちゃんは今日、いつもの精神科の訪問看護師と家族とともに、何度目かの家の周りの散歩をしました。しばらく前までは、外に出ることを怖がっていたきゅうちゃんでしたが、人通りの少ない時間帯に散歩をして、開放的な気分になったのか、懐かしい日々を思い出したのか、ぼつりぼつりと会社での辛かった経験やこのままではいけないと感じているけど、動けないことを家族と看護師に話してくれました。

家族も看護師もきゅうちゃんの思いを真剣に聞き、今も辛い思いをしていたんだね、頑張ったね、ときゅうちゃんの背中を優しく支えてくれました。きゅうちゃんは、一番辛かった時の自分も救い上げられたような気分になりました。

今、部屋の真ん中できゅうちゃんは、ゴミの山をダメな自分と重ねると同時に、こんなにしてしまうまで、自分がきつい思いをしていたことに気づきました。自分の辛さを受け止めることができたのです。些細な変化かもしれないかもしれませんが、きゅうちゃんは自分を大切にするための一步を踏み出したのです。明かりを消したきゅうちゃんは、普段より安らかに眠りにつきました。

IV. 考察

今回用いた「見えそうで見えないきゅうちゃんの表情」と「散らかった部屋」が、学生に様々な想像力をもたらした。人間の優しさや弱さ、前向きさや乗り越えたい壁、そしてきゅうちゃんの苦悩など様々な事柄が表現されており、学生一人ひとりの人間味があふれていた。どの作品もきゅう

ちゃんの想いに共感できる作品となっていた。そのため、授業者自身も楽しいと思えると同時に、精神看護を考えるうえで学びが多い授業であった。

まず、学生の情意面から考察する。鮫島・石田(2023)は「きゅうちゃんは、学生たちにとって変幻自在的存在として立ち現れており、これまでの経験と相互作用によって、様々な意味を生成する協応行為の対象となっている。そのため、きゅうちゃんは、時には家族、時には友だち、そして自分自身にもなりうるのである。(p.68)」と述べている。今回、物語を書く段階で、きゅうちゃんの気持ちに同調したり、自分の経験を反映させたりしてしまい、「苦しかった」と感想を述べた学生がいた。まさに、きゅうちゃんが自分自身になり、学生の情意面を揺さぶった場面である。しかし、この苦しさは、作品発表の中で他の学生から称賛されることで解消されている様子もみられた。さらに、他の学生の作品にふれることで「楽しかった」という感情に変化したという者もいた。特に授業者が興味深かったことは、作品の場면을想像しながら聞き入り、その作品の中に感情までも投入する学生の姿であった。その聞き入る姿は、一喜一憂したり、息をのむ様子だったり、安心した表情だったり、感情豊かだった。また、学生の感想にあるが、作品の中のきゅうちゃんを自分と照らし合わせることで、「自分の性質に気づいた」という学生もいた。このように、作品の中に自己を投影することで、客観視し、自己理解を深めるというプロセスにつながったのだと考える。

次に、学習面から考察する。物語を考える過程で、学生たちは既習知識を活用したり、改めて疾患の学習をしたりしながら、作品を構想していた。また、発表時に症状や疾患を考えながら聞くなど予想以上の学習活動が行われていた。特に、発表をただ聞くだけでなく、作品から疾患や症状を想像するという思考力を働かせていたことは期待以上の成果であった。本稿に掲載した3作品は、学生の知識で容易にきゅうちゃんの状況や症状、家族背景まで想像できる作品となっている。鹿内

(2023)は「ビジュアルテキストの読解には、個人によってズレが生じてきます。(中略)このようなズレは学生同士の活発な話し合いをうみ出します(p.31)」と述べている。この読解のズレが学生の興味・関心を刺激し、「全員の作品を読みたかった」という感想につながったのではないかと考える。そして、この読解のズレを生じさせたのが「見えそうで見えないきゅうちゃんの表情」なのである。中には「なんだ、この課題は」と思った学生もいたようである。しかし、多くの学生が発表は想像した以上に楽しかったと感想を述べている。これも、読解のズレが生み出した結果であると考えられる。鹿内(2023)は「看図アプローチは学習者を学びに引き込む力をもっています。さらに思考力・判断力・表現力を育成する活動を引き出すしかけももっています。(p.31)」と述べている。今回用いた絵図から学生はさまざまことを想像していた。そして、表現した作品そのものが教材となり、それぞれの作品に学生自らが入り込むことで相互作用し、学習活動は成り立っていたと考える。

最後に、授業者の実践を考察する。看護は対象者を身体的側面・精神的側面・社会的側面の3側面から捉える必要がある。今回用いた絵図は、身体的・精神的側面を「見えそうで見えないきゅうちゃんの表情」と「散らかった部屋」から想像し、社会的側面を病院ではなく「自宅の部屋」という背景に設定したことにより3側面から学習できる教材となっていた。吉野ら(2019)は、「授業は、教育目標を達成するための意図的な働きかけであり、教材はこれを使えばこういう学びが可能であるという単純なものでも、教材だけで学習効果をもたらすものでもない。教員がどのように活用するのか、教材によって学生がどのように学習内容を受け止めるのかということを含む複雑な構造がある。そのため、授業展開方法には様々な工夫が必要である。(p.125)」と述べている。そのため、この授業では、作品を発表したあと、どのような発問を投げかけるかが重要であった。今回の授業展開では、「それぞれの作品のきゅうちゃん

に、どのように寄り添い、どのような言葉をかけるか」という発問を行った。この発問により、学生はさらにきゅうちゃんの世界を想像し、看護師としてきゅうちゃんの言葉を傾聴していた。そして、次のような視点で寄り添い方を考えていた。ひとつは、気持ちを受容し、共感的態度で接するという視点。もうひとつは、自分ならこうしてほしい、という主観的な視点、である。この2つの視点を持ち、考えていたことに看護学生としての成長をうかがえた。しかし、看護を創造的に考えるという視点では、学生の主観的な思考にとどまり、客観的に看護を考えるに至らなかったと考えている。

V. 今後の課題

今回、初めて看図作文を用いた授業を実践した。学生が「想像」したきゅうちゃんの世界は、授業者の想像を超えるものであった。学生の感想にもあったように「全員の作品を読みたい」という興味・関心を引き出す学習活動はできた。しかし、作品集を作成しなかったため、全体で共有するには至らなかった。今後は学習活動の中で、全員の作品が共有できるよう授業設計を行うことが課題である。

きゅうちゃん表情と散らかった部屋を観察し、学生が想像した物語はどれも看護を創造するうえでは大切な視点が組み込まれていた。今後の課題は、学生が想像した物語から、看護を「創造」していくためにどのような「しかけ」を行うかである。

「ビジュアルテキスト」と「学生の作品が生み出す教材」、そして教員の「発問」という3つのしかけがそろったとき、どのような『創造性』が生まれ、精神看護を発展的に考えることができるのか、追実践を行い研究的に取り組んでいきたい。また、本稿は授業者の「主観や印象レベル」での考察がほとんどになっている。今後、データに基づいた考察を行っていきたい。

謝 辞

本稿執筆に際し、お力添えをいただきました鹿内信善先生、「きゅうちゃん」の使用を快諾いただいた石田ゆき先生に心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 厚生労働省 「看護基礎教育検討会 報告書」
<https://www.mhlw.go.jp>（令和元年10月15日参照）
- 鮫島輝美・石田ゆき 2023 「演習型授業における学生の主観的学びの記述についての言説分析—自己紹介に看図アプローチを活用した事例から—」『協同と教育』第18号 pp.53-73
- 鹿内信善 2014 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ 協同学習の新しいかたち・看図作文レパートリー』 ナカニシヤ出版
- 鹿内信善 2015 『改訂増補 協同学習ツールのつくり方いかし方 看図アプローチで育てる学びの力』 ナカニシヤ出版
- 鹿内信善 2023 「看図アプローチの可能性を拓く—特集号を編集して—」『協同と教育』第18号 pp.31-34
- 吉野由美子・池邊敏子 2019 「精神看護学の授業教材に関する研究」『千葉科学大学紀要』第12号 pp.119-129

2023年5月28日 受付

2023年6月9日 受理